

「心の位置を上を持つ」

2016年04月22日

1994年に「松本サリン事件」が起こった。死者8人、重軽傷者660人を出す大惨事であった。当初は、毒物がサリンと分からず「毒物使用多数殺人事件」と言われていた。やがて9ヶ月後に、地下鉄サリン事件が起こり、オウム真理教の教祖・松本智津夫の指揮による一連の犯罪と分かった。毒物使用多数殺人事件が起こった時、第一通報者の河野義行氏が容疑者とされ、地元の新聞も大手の新聞、雑誌も犯人扱いをした。私も諸々の報道から、河野氏は薬物を持っており、配合を間違い、毒性ガスを発生させたのではないかと思った。

この間、河野氏は犯人と断定されたような扱いを受け、その被害は並大抵ではなかった。ところが、河野氏は実に淡々と対応され、その冷静沈着さに敬服した。家族が皆入院し、高校1年生の長男が家に残されたが、「ここで逃げていたら、うちはおそらく世間から潰されるぞ。いま、うちがやらなければいけないのは、どんな電話に対しても真正面から真撃に対応する。それが必要なんだ」と諭したという。息子さんは、そのように対応した。奥様は意識が回復せず、14年後に亡くなられた。河野氏と家族が負った犠牲は計り知れない。

ジャーナリストの浅野健一氏が「浅野健一ゼミ in 西宮」を開き、『冤罪とジャーナリズムの危機』と題して「講演と対話」をまとめ上梓している。二回目のゼミに河野氏が招かれ、講演をしている。本人と家族が受けた諸々の被害とその対応を語った後、次のように語っている。「逃げたいときほど逃げないということは大事なことなんです。人間は一度逃げると、次々に逃げざるをえなくなってしまうんです。そこで私や家族がどうやって心のバランスを維持してきたかという、心の位置なんです。自分たちは悪いことをなんにもしていないのに、そういういやがらせを受ける。それは、いやがらせをしている方が悪い。それならば、自分たちは心の位置をそのひとたちより少し高くして、なにを言われても、なにをされても許してあげる。そういう位置に心を置いて普通に生活していこう。こう決めたわけです。心の位置というのは、圧倒的に不利な状況であっても、上げることができるということです。」「心の位置を高く置く」ということは、自分を優位なところに置いて相手を見下すことなのかと思った。私たちはしばしば、そのように考え、苦しみに耐えようとすることがある。

講演後の《対話》で、「心の位置を高く」することが大切なのだという事は分かるが、その気持ちをどうして保つことができたのかという質問に、河野氏は下記のように答えている。「はい。生きているなかで、死がいつも隣りにあるというスタンスなんです」。河野氏は再三、死に直面するような経験をしている。「その都度、死んだと思ったんですが、いまだに生きています。そうすると、死というのは年齢じゃないということが一つ言えます。もう一つ、生まれてきた以上は幸せに終えるように生きたい、幸せに死にたいというのも基本なんです。そうしますと、私を苦しめている人たちをとことん追及するような人生が、果たして幸せなのかと思うわけなんです。それと、犯罪を犯した人が反省しようがしまいが、それはその人の問題であって、私の生き方とは別だという想いもあります」。

「心の位置を高く持つ」ということは、自分を優位なところに置くということではなく、死が隣りにあることをリアルに認識する、だから、今を幸せに生きたいと願うことである。それが、理不尽な扱いを受けても、許すことにつながっていくと言っている。河野氏の冷静さは、ここにあったのだと納得した。そして、この考えと生き方に感銘を受けた。死が隣りにあることを知ることは生き方を決定的に変えていくことは確かである。